

積善編

二十六

共善拾遺

| | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 品目 | 品目 | 品目 | 品目 | 品目 |
| 品目 | 品目 | 品目 | 品目 | 品目 |
| 品目 | 品目 | 品目 | 品目 | 品目 |
| 品目 | 品目 | 品目 | 品目 | 品目 |
| 品目 | 品目 | 品目 | 品目 | 品目 |
| 品目 | 品目 | 品目 | 品目 | 品目 |
| 品目 | 品目 | 品目 | 品目 | 品目 |
| 品目 | 品目 | 品目 | 品目 | 品目 |
| 品目 | 品目 | 品目 | 品目 | 品目 |
| 品目 | 品目 | 品目 | 品目 | 品目 |

280
7
1A-26





豊後編卷之二十四

明治十九年
八月 點 查 章

和泉文化会館
昭和 33.7.30
36275

A 260
7
1A-26

夫より陸奥をいせし臣供の取揚州の沖を
たいて難波正臣けり定より安永正奉例の
如く室津小左のいし以取のさ指揮つる
貯方文其の後寛治とい志を在ていも難波
正臣のいし以信其君も後正臣といも而信も

いさ中せしううわ我時を定せよと申す
はそくそ録せしゆある材必しも好むは
道者の眼を踏やうんをきてしと作の
さうへ、道志を花きふ茶を我とて思ふ
かまうん、何れ能せん、長もえと申す
さうへ、追のやういふ、材を費し、此れ
斯くなるなん、奢り此後、一と申す
いさの材も、さういふ、用ひて、此れ
一、いさの材も、さういふ、用ひて、此れ

のものをうらた多し、君へ、在り、同
なり、うらた、追を、此れ、いさ、不使、下
在り、うらた、多し、君へ、在り、同
なり、うらた、追を、此れ、いさ、不使、下
在り、うらた、多し、君へ、在り、同
なり、うらた、追を、此れ、いさ、不使、下

一、君は、此れ、いさ、不使、下
血出ても、若し、此れ、いさ、不使、下
さういふ、用ひて、此れ

一 一の日の糸軸ある本巻通をうらひかたふあ
定録をとりし留者正史祖ニ世を歴代正史
通一り外華乃此い一付の四巻札と持持
つて通正史書せしお陽くく書夫とのあし
々の世中と通のせき札といふよりかはるるお奇
おうたりし様も位てそきたをくせそくか
後をば成お供つきより後せりる所乃のお銀
お家のお宛札掛をくくせん世史書する一と
中とのるそれとも用いひつるるか 女おお任一

ういんまは正親少も此後少持し書せり出でん
逐例志つたりし中とのるそれとも不しきき
なせそと元のみしおわくせしと

一 正史のあふるる正史の巻々を正史の巻々をか
てて可しとてを好まむりなまそれをくふそ
極りの巻々をくく正史とてつるるはくくとの
りもむいふそとてのそふ一二年本巻通を
そとの巻々をくく申候ありとれは正史の巻々
巻々誰を張り阿るるいそと阿せりあはは

さきかゝるふとて解言解とてさせ多ひて不^ふま
 是^こ我^こず^く位^も多^くなり事^の中^をつ^とめ^りか
 くれ^ばて^まい^くる^りや^らる^るに^てそ^の金^銀を^華
 に^して^置つ^りお^のかり^やも^氏の^業を^始け^りと^の
 事^へか^らん^とそ^のお^のかり^をさ^する

一 或解

命^の許^使り^之き^かり^とま^り種^類多^く
 ろ^りて^定解^さり^て待^たれ^ばい^ひに^家族^時別^種
 お^のかり^をま^しら^んと^てい^ふ一^真い^急き^真の^身

乃^をそ^の木^材如^し長^きと^いひ^て通^ちお^のの^志強^く解^を
 多^くと^して^もと^の通^ちお^のの^志強^くと^する^りと^する^り
 を^忘れ^ずて^不お^のかり^をす^るに^おも^いふ^も 上^使を^中
 告^げし^て何^れを^てお^のの^志強^くと^する^りと^する^り
 大^にお^のの^志強^くと^する^りと^する^りと^する^り
 君^世不^結れて^上使^をと^もや^まい^つて^いふ^も
 禮^をお^のの^志強^くと^する^りと^する^りと^する^り
 為^りて^から^んお^のの^志強^くと^する^りと^する^り
 君^世不^結れて^上使^をと^もや^まい^つて^いふ^も

長きついでに おそれてと何の事もなく
うらげうらげを口送りして立腹の如き
長きついでに おそれて 以て景を
うらげうらげを口送りして 何の
有りて 時々に 何の
と申すに思ひて 喜んじて 以て 景を
世に あり

一 此を 園東の 権少の 蹴鞠を 遊んで 其の 物
事 此の 由り あり あり あり あり あり あり

世に 遊んで 常ふ 常く 常く 常く 常く 常く
白いて 白く 白く 白く 白く 白く
かゝる あり あり あり あり あり あり
まゝに 大なる あり あり あり あり あり
見若く あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり

いと 大波に大なる波も 徳を以て 家来共
物をもくろむくをせ 徳を以て 徳を以て 徳を以て
冥い 冥い 冥い 冥い 冥い 冥い 冥い 冥い 冥い 冥い
或は 或は

一 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も
られ られ られ られ られ られ られ られ られ られ
人見 人見 人見 人見 人見 人見 人見 人見 人見 人見
別 別 別 別 別 別 別 別 別 別
さ さ さ さ さ さ さ さ さ さ

よ は お の 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也
也 也 也 也 也 也 也 也 也 也
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま

一 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も 筆も
可 可 可 可 可 可 可 可 可 可

そ用言しとらん奪りし義いさなりとて一書
つて空のく又根の物も必す付はるるを
クけ乃抄りて事是ら知れ冷飯まうら
一 薬方の後人といふ者より定のるるを奪り
在りしとて奪りて薬を服せし時乃奪り
て事是らなんそ其をも其述てり

一 此不宣いれ世の中多分物水大といわれ
水といふをきいては妨げをすれとも
を奪りしとらんそ其をも其述てり

必す奪りしとらん奪りしとて一書
つて空のく又根の物も必す付はるるを
クけ乃抄りて事是ら知れ冷飯まうら
一 薬方の後人といふ者より定のるるを奪り
在りしとて奪りて薬を服せし時乃奪り
て事是らなんそ其をも其述てり

一 賢慮のほむ武吉立薬意なくん難具大令報
用也とてはる家中小おそくは身も可く
守りて子武吉立例不宿薬はあまの志古園に乃

久しきに依りて侍も
密に伝へて有るは此の如く
しりて申す何事といふ
形も亦くを扱ふつと
今も亦く
事いふ
之の用六
は
は

一 或時柳川の城に喜在殿は

あし卯月の日
程世
君
持
は
を
と
つ

中を引くものをもよめたるものなりといふるが
よのたふれを煮下り

一 又玉の菩薩が妙解者にて青き切りまきけ
せよまらるる花豆腐といふものを作せしるまは
豆腐をおしく振紅してしるすといふ
よのたふれは法師もいふをよの後のせんをい
ふふ唐屋流といふ原部の思ふて冷おふい
つこの巧をいふ材をも胎をも昔はよといふ
よのたふれといふものも味は整ふまといふもの

とて煮下り又成者ふまといふふは 塩井といふ
方をぬりおふふこの唐お何の粉といふものを結
なまおしする等の袋に入て煮をふ成材かの用
より出流といふ我唐屋もがら物を煮しする花
奈ふりといふ是玉の袋といふ基なりといふは
よのたふれを煮下り

一 月一寺あり松田侍食する事ありありいふは
玉の豆腐の制法委敷なりて教もいふ
おるすといふは是をいふは崇といふせといふ君

すゝを我がまをこゝてしを思ひ思恩を
因舎少く行んをよまれとそ又武時の物語
は玉の着るの世何となく物やうらみ安き風情
の見えぬ人の心は怪有するゆゑとてい
と白おしと真いし紅泪とて親友をよぶ
昔はくしてさびしい程を叙す使者をぬり
久しきもたの事と思ひやうとてこの事の
之中よ今陰通の文とをうけしむし西遊記
も心肝あはれ物語とせば二座をわけたる

一

一 昭和九年二月の火災小籠の只乃屋形焼て
白銀を拂う任せをいひらぬをこふ事吾人の言
ては乃や成不何のふ系大補及信をいひて
冊にせりい一つ色くなくんをよぶ
と原本小籠の酒飲ひは道に路を破いて笑ひ
さう我君も涙く無ふやせとては時いぬ故の
事うたうらん賑年喜の猪名籠乃まう馬
とせりなまう近寄を建と十九とて忽ち
と改めいねも涙く群を喜ぶ老人とてあり

とれをたゞり言進つた云々の中をいせや五世を
以て在りて侍り何の事か今も之を語らざ
りし所より中へ果た今をいせや五世を
右へ事の中をいせや五世をいせや五世を
終りて誰か其の下ぬまへては宵待居申す
終りて誰か其の下ぬまへては宵待居申す
終りて誰か其の下ぬまへては宵待居申す
終りて誰か其の下ぬまへては宵待居申す
終りて誰か其の下ぬまへては宵待居申す
終りて誰か其の下ぬまへては宵待居申す
終りて誰か其の下ぬまへては宵待居申す
終りて誰か其の下ぬまへては宵待居申す
終りて誰か其の下ぬまへては宵待居申す
終りて誰か其の下ぬまへては宵待居申す

一 紀傳中納言治定公いなりし時 夫れ母をいせや
以て紀別不詰麟肥後風凰を市童に與也
〜或母道智乃その世より可成法然の事
〜その事なる向條肥後風凰を之に道臣に
凶年其後或は市中の扶物を之に與せし
〜その事なるや乃て或は其の事いせや五世を
〜その事なるや乃て或は其の事いせや五世を
一 或は御孫なる道智乃若くは父母宮の中を
〜その事なる母をいせや五世をいせや五世を

事これもたれまわらばと老を
親おろしよのこを極い方を全を極しよれ
の金納もたれまわらばと老を
樂も事多しといふ

一 吾等何事かせん
少時そふふふふふ女を極しよれ
それいほせかていふ事多し
と女は白紙しとて可い
人かたよとていふ

一 或村松乃たれと本なり
ふー極いなんを極いこれ
此は本なりと白をよ作らる
はさバ極いなるを極い
今も極いなるを極い
ふらふの極いなるを極い
と極い此は本なりと
一 昔侍候しとて
今國を極いなるを極い

家毎ふかひきて新浄をまゝ具かすといひ
かな

一 妙慈院殿に多くて共せし以閑在りし時の執
権乃出許一家老長是勤解由言し以物解由席
極親浄度^印團圓三々物多かりしなりと云
ふは在極乃物をもほくのいしててもよもいふ事
つふと因をよ勤解由言す三人少中も僕も
侍は重なるしをいふはぬえをふまうつ
やうなけ向ふ云九とけり小大玉を附

書りていふ成りもも此入人時思ふ程のた物
とも侍りし人々を分ふことゝ家老等持持
立りて下御年々々々々々々々々々々々々々々々
いふはなせしは公指軍使等々の為なりとの
用事と云ふは重なりし守殿室ひしそれ
をもあたる名を白上殿と云はれしなり
とも殿とつゝ多分云え事なり此後さか
しめり少きまもそ料今も少共事を追て減
事ハ少共まゝなりしなり勤解由言す中らと

女主人より以来君が初より世滅乃後其の道も
程々の数字も何より誠お玉の道あり存せざらん
これに時より扶持乃れいとなんらんもむか
をや志ばるる残餘く悲しむせりして世はひ
しきばえ申しこれをもいふ事ゆるは
との考と思はるる以本をたうし或時後家
をこの福を世に傳へてせし用ひのひるをいふ
近侍乃志も其名乃物もいづらん見苦なり新
しむる若く年せせをいふせしむるいふもいふ

の志をう契あうもいをみるらん中を室もそれ
契しむる凡を相傳へせられしを中せし
うはそれいふ但せぬというち志をいふ
しむるいふし其子之可恥思乃るを
事ぬとの世志乃儉約節ふさうわし通る
と事いふ進んすなすつや事と事いふ
おきり

一
しむるいふらん世事志き大石の才を優ちふ
しむるいふらんを傳へるいふし進智の志共

語るあひたるをきかぬのい誠ふ々の世ふ後
才有り但し韓非子書をやぬるやんを荒ゆ
可なりとのい

一 昔宅城の田ゆき子白銀乃田曹目の田許ふ渡せ
かゝるさゆや田守丹を何うて己乃割る
より侍せるいふ系るふ目るや渡せりや
いへ例違ひて可なりといふりれり
しも言中ゆやむのな義法方正に
被ふふりて田田渡り時ゆりぬる

まの装束ぬぬてしやとて田袴のきもり物
今日乃田方改をぬぬるふとていせ
息靜なる程なるといふや中なるはさか
ふうていせまゝとて一言といふは
んを思ひぬいづきもとてやむるは
ともいふ人もぬるはぬるはぬる
さすりやいふりる事といふは
いふと道てさやとのい
とのを感しぬる

とも是ハ君乃物を用ハ早節度ナルとて
覺出^レ一切乃よ用を以キテ為ルル大君の
以許ナク少テ事ハ尚テ用ゆ^レとよを用ハ
さんハ各番ナク下^一上事ナク上^一時ナク
下^一不費^一志^一志^一を^一儉約^一と^一下^一君乃物
さの如クナク^一善^一公^一燭^一淚^一の^一お^一ろ^一も^一ナ^一ク^一公^一録
布被^一の^一そ^一く^一重^一も^一ま^一り^一下^一

一 以筆著り^一 禮^一を^一下^一あり^一下^一書^一牒^一の^一性^一優^一せ^一也

臣祐云和史不樂山を^一物^一也
左餘一章を載せを^一不^一替^一せ^一也

一 以著述を志^一り^一 歴^一政^一道^一の^一事^一を^一書^一せ^一り^一下^一
可^一り^一少^一も^一ナ^一ク^一或^一た^一 歴^一史^一乃^一内^一外^一面^一を^一く^一ゆ^一り^一我^一
事^一を^一蒙^一求^一の^一標^一題^一の^一原^一を^一下^一に^一せ^一り^一下^一
う^一も^一下^一 切^一終^一を^一下^一に^一せ^一り^一下^一 下^一に^一は^一倉^一
と^一馬^一と^一同^一一^一種^一の^一之^一と^一を^一理^一を^一下^一に^一せ^一り^一
出^一か^一い^一し^一物^一を^一下^一に^一せ^一り^一 終^一に^一下^一に^一せ^一り^一
之^一の^一下^一に^一せ^一り^一下^一 下^一に^一せ^一り^一下^一 下^一に^一せ^一り^一
集^一の^一只^一れ^一も^一見^一若^一敷^一と^一の^一下^一に^一せ^一り^一下^一 下^一に^一せ^一り^一
と^一下^一に^一せ^一り^一の^一只^一れ^一を^一下^一に^一せ^一り^一

一 宝曆九年八月廿四先祖述齋君百廿四回忌
尚也といひぬれ竹原幼平守玄跡ふ位せよと
去後英無念とて幸り(寫念の心影をうへ)とせ
頼もせせ有柳川鐵仁親之小述齋君の和歌音
の海宇をヤ後又い風早之位に雄も歌を
おくりとて幸り何り何り(以寄月懐舊
と事を人ふそよの経いて思ふ)とて
是よりな交彩ふ昔乃悲れれて
それ泪乃何交れ夜の月

一 四年おひせりひて七人の唱和及をぢ義中
そりおなりとて色もなきとてむくのよとゆり
考ふおれと秋の夜をやとて思ふとて思ふ
桐干おりて月をたうのやと夜尾(おれ)とて
いと昔を思のせりして懐舊とてと歌の思
けり

龍溝郎夜將闌 明月西風獨倚欄
筆似木筆東海賦 樓同庾亮武昌看
昔時高調空歌罷 今世朱絃誰復彈

獨坐蕭條懷舊處 秋來白髮不堪寒

一天敗草平の秋のほのかに月影ありて
月の影をよこすにさきく句かなせりひるよ

時雨の音

時雨の音 雨の音 雨の音

さそと世々山をたふしゆく 白く波をたふしゆく
いこ心やそくと免えたる 廿四日よ 大浦原と
初めよせり 老臣をたふしゆく 一と一と
事なとをよせしめまらる

一 九臯の鶴を登天不老と一室の言を名千里上

つらと仙人君のこころを 國を日本の内を

てを筑紫のこころを 長をたつ 誰を捕く方

三千里して 遠き 然るに 義は今九の

とわが 遠きいふと 西無縁が色とて

以和公事の流家士後於疎奴なること 後には

此茶屋長崎よりつらと 九月 一と

流石の留る店とて 書を唐人とてその 旅殿

流石の事つらと 流石と行ぬ 書と 意は

筆を唐人を斜に引くは遊逸しやまの
しく反摺状をてあつぬるは我々若くは
これおしるるべきにあらざる者たる例の
なせともいへばと辨じてまの出入り年を以て
黄維幹王世吉といやのまゝにて其の
の曲の樂奏にてなくさあつて胡をともより
人といへばを譯去りてあつて中なるは折紙
屋の賢明を辨しし歴の道をこゝとて學校
とて好むるべきとてとる近可也可也

ら幸ひまうてこの國の人を河を見まうぬ異
帰りの流るる何の家のも是れをえんとい
の法を收む座敷より程のまゝを録めまう
のむらまへていへば可なりは此を辨し
なり

一 又或年長高少年可 宋葉石を以て唐人

約の排律を賤^紅して其の徳政を潔く其

詩を即書し流りて
其の勢を以

一 世若常小名處を實不は其を人よりいへば

昔何人國の女ふいさき事をもなせふと
世にけり梓也ち里をいんていかにあつ海もの
けりもをさし名まておのしとせせさう
くるとのちりともていふわつと治教をかりんか
世にいふまゝ人をも敷敷少の度をもあつ
こゝろ也ていり割りいひし事をもいふていふ

徳信編卷之三六終

